

周辺の  
みどころ

信楽と言えば「紫香楽宮」は無視できない。奈良時代・聖武天皇の都で、一時期信楽こそが、日本の首都であった。天平14年(742)の行幸に始まり、天平17年(745)の平城遷都まで、わずか4年あまりの都であるが、その間に、聖武天皇は大仏建立の詔を発するなど、歴史的に極めて重要な都とされている。

信楽北部の黄瀬地区と宮町地区に所在する甲賀寺跡や鍛冶屋敷遺跡、新宮神社遺跡、宮町遺跡などが紫香楽宮の史跡である。天平ロマンの散策が楽しめる。



甲賀寺跡



【アクセス】

- 信楽伝統産業会館のある甲賀市信楽中心部へは
- JR草津線貴生川駅から信楽高原鉄道信楽駅下車
- JR琵琶湖線石山駅から信楽行きバス産業会館下車

【もっと詳しく知りたいひとへの案内】  
(関連文献/関連施設)

- 県立陶芸の森資料館 Tel. 0748-83-0909  
信楽焼を中心に陶芸全般について展示解説
- 信楽伝統産業会館 Tel. 0748-82-2345  
信楽焼の過去・現代・未来が理解できる。
- ロクロ体験などができる陶器店なども多く、百聞は一見にしかず。やってみよう!

# 信楽焼

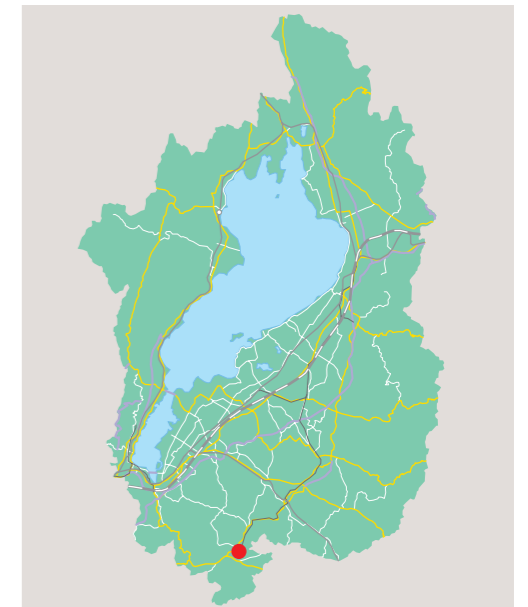
甲賀市信楽町一帯



ご存じ ずらり並んだ狸の置物

土と炎の芸術と呼ばれる信楽焼。独特の陶土と趣ある緋色によって、茶人に愛された信楽焼。そして、タヌキの置物で親しまれる信楽焼。この信楽焼を水・琵琶湖の産物と言え意外だろうか。

陶器生産のための重要な条件は、良質な粘土である。淡水に堆積した不純物の少ない粘土で、これに適度な石粒が混ざることによって、独特の風合いを持つ陶器を生産することが可能になる。400万年の歴史を持ち、かつ、大きな地殻変動を繰り返した琵琶湖。その歴史の中で堆積した古琵琶湖層こそが、信楽焼を生み出したのである。





「清六」の刻印のある煎茶碗  
(甲賀市牧8号窯出土)

初期の常滑焼に似た大甕  
(大津市上田上牧遺跡出土)

## 信楽焼

所在地 甲賀市信楽町一帯

### 信楽焼の歴史

信楽焼きの歴史は13世紀、鎌倉時代にさかのぼる。はじめは、東海地方の常滑焼からの全面的な支援を受けることによって生産を開始したが、次第に独自の技術を確認させ、生産量も安定していった。戦国時代になれば、茶の湯ブームの中で、その独特の風合いと緋色によって、茶人に愛され、生活雑器の生産だけではない、高い価値観を獲得した。

江戸時代には京焼風の焼き物を生産することで、一気に生産量を増大し、また、その粘土の性質から、お茶壺の生産でも名を上げた。お茶壺道中の主役は、信楽焼の茶壺であった。

さらに、京焼風陶器の生産を導入したことで獲得した釉薬の技術と、お茶壺などの大型製品の生産という性格が一体となった時、火鉢という明治から昭和にかけての信楽最大の特産品を生み出した。そして、その火鉢の技術こそが、現在のタヌキの置物に受け継がれている。

### 職人が活躍する生産

茶陶として高い人気を誇る信楽焼ではあるが、京焼のように、「名人」や「有名工房」と呼ばれるものは少ない。むしろ、信楽焼には陶器職人がこつこつと生産するというイメージが強い。初期の名品である「うづくまる」の壺なども、作者名は伝わらない「職人」の手による作品なのだ。

そこには、京都という巨大市場で勝ち抜くために、名人によるブランド力よりも、大量生産という方向に活路を見いだしたことも大きい。限られた名人の営む少数の窯場ではなく、多くの陶器職人が生産に従事する窯業地帯・信楽が誕生したのだ。

特に江戸時代後期には、良質で豊富な粘土を背景に、京焼の下請けを行っていたとも考えられ、京焼の有名ブランドと考えられる「清六」の刻印がある茶碗が牧8号窯から出土していることは示唆的である。



最近復刻された汽車土瓶



粘土板を組み合わせて植木鉢を作る



泥瀟を鋳型に流し込む



機械ロクロを回す



仕上げはロクロで調整



信楽学園では種々の製品が生み出される

### 未来の職人を目指して

信楽焼きの歴史・性格を受け継ぐ一つの施設が滋賀県立信楽学園である。知的ハンディキャップを持つ児童が、機械ロクロや泥瀟鋳込みなどの窯業技術を身につけ、社会的な自立を目指す施設である。

学園内では協力・強調しつつ作業を行うとともに、近隣の事業所での職場実習も行われ、窯業技術とともに「働くよろこび」の獲得を目指して努力している。その子供達こそ、まさに水の宝の継承者に相応しい。

最近では、かつての信楽焼の主要製品であった汽車土瓶を復刻させ、注目を集めているほか、琵琶湖の汚泥を混入した製品の開発・制作などにも取り組んでいる。

また、信楽の各所には、伝統的な窯場に混じって、各地から集ってきた若い作家が窯場を開いている。特に、陶芸の森では、海外からの留学生も受け入れ、陶芸技術の研鑽に励んでいる。水の宝は近江へ越え、世界へと広がるのである。